

第31回 明治大学人文科学研究所公開文化講座のご案内

— 総合テーマ —

声なきことば・文字なきことば

公開文化講座開催委員会委員長
明治大学商学部教授 西山春文

明治大学人文科学研究所では、毎年秋に公開文化講座を開催してまいりました。明治大学を舞台に、多様なジャンルの研究・実践成果を広く一般の方々に御覧頂き、また、逆に大学も社会からさらに新たな知的刺激を頂こうという企画です。

現代社会には情報があふれかえっており、ともすると情報の海に溺れかねない状況にあります。でも、こういうにぎやか、きらびやかな社会だからこそ、最も本質的な目立たぬことばを大切にしなければならないのではないのでしょうか。世の中にはもっともっと耳を傾けるべきことばが、あるいは掘り起こされるのを待っていることばがあるはずです。それらに触れ得た時、私たちの人生はこれまで以上に豊かなものになることでしょう。

31回目を迎える今回は、「声なきことば・文字なきことば」というテーマをめぐって4人の講師がそれぞれの得意分野から縦横無尽に話をして下さいます。

多くの方々の御来場をお待ちしています。

主 催 明治大学人文科学研究所
日 時 2007年10月5日、12日、19日、26日（毎金曜日）
午後6時30分～8時30分
会 場 明治大学駿河台校舎リバティ・タワー1階「リバティ・ホール」
(JR御茶ノ水駅下車徒歩5分)

聴 講 無 料（事前申し込み不要。直接会場にお越しください。）

第1回 10月5日(金)

「無言館」のこと

「信濃デッサン館」「無言館」館主・作家 窪島 誠一郎

「無言」ということからいえば、むしろそれを強いられるのは戦没画学生たちの絵の前に佇むわれわれのほうといえるのかもしれない。かれらの静けさにみちた遺作群とむかいあうとき、そのけなげな「現実回避」の痕跡とむかいあうとき、ただ「無言」のまま立ちすくむしかないのは今を生きるわれわれのほうなのである。

まず第一に私たちの口をつぐませるのは、かれらののこした絵を五十余年にもわたって雨ザラシに放置してきた「戦後」の罪の深さである。かれらの「声にならぬ声」の証であるところの絵の保護、保存をすべて遺族任せにし、そこから発せられる声に一滴の注意も払おうとしなかった自分たちの「戦後」に対して、私たちはただただうなだれるしかないのだ。そして同時に、かれらの絵がそうした「戦後」の非情な扱いをうけながらも、ひそかにその生命を永らえさせて今日まで生きつづけてきたという奇跡に対しても沈黙してしまう。かれらのナマ身の生命は戦場に消えても、作品にこめたもう一つの生命は今もたえることなくこうやって厳然と私たちの前に存在している。これはかれらにとって「絵を描くこと」がいかに有力な自己表現の手だてであり、それによってかれらがいかにつよく戦時下を生きぬいたかという証左でもあったろう。

—— 集英社新書

窪島誠一郎著『無言館ノオト』より抜粋

略歴： 1941年東京生まれ。印刷工、店員、酒場経営などをへて1964年東京世田谷に小劇場の草分け「キッド・アイラック・アート・ホール」を設立。1979年長野県上田市に夭折画家の素描を展示する「信濃デッサン館」を創設、1997年隣接地に戦没画学生慰霊美術館「無言館」を開設。

主要著書： 実父水上勉との再会を綴った『父への手紙』『「明大前」物語』（筑摩書房）、『雁と雁の子』『信濃デッサン館日記』Ⅰ～Ⅳ（平凡社）、『漂泊・日系画家野田英夫の生涯』（新潮社）、『無言館ものがたり』（第46回産経児童出版文化賞受賞・講談社）、『鼎と槐多』（第14回地方出版文化功労賞受賞・信濃毎日新聞社）、『無言館ノオト』『石榴と銃』『鬼火の里』（集英社）『無言館への旅』『高間筆子幻景』（白水社）等がある。「無言館」の活動により第53回菊池寛賞を受賞。

第2回 10月12日(金)

声なきことば:テレパシー研究の真相

明治大学情報コミュニケーション学部教授 石川 幹人

日本のテレパシー研究は、世界に知られた業績があります。明治時代末に東京帝国大学助教授の福来友吉博士が行なった千里眼実験です。博士はインチキ騒動に巻き込まれ大学を追われますが、実験結果の報告書を英語で発刊します(最近復刻もされました)。テレパシー研究はその後の日本では、心理学をはじめ自然科学の諸分野からタブー視されてきました。しかし欧米では超心理学という名のもとに研究が続けられ、全米学術会議に登録されている超心理学協会は、この夏第50回目の年次国際会議をカナダで開催しています。

本講演では、ドリーム・テレパシー実験、遠隔視実験などを解説し、超心理学がいかに厳密に、有無を言わさぬ実証的データを積みあげてきたかをお知らせします。それは、個別に隔離された人間という自然観の終焉を示すものでありましょう。言語を理解するロボット開発の挫折や、現代物理学の奇妙な実験結果は、自然科学の内部でさえ全体論的視点の重要性が見出された出来事と言えましょう。東洋思想が注目される時代が再度到来する予感があります。

略歴: 1959年東京生まれ。東京工業大学理学部卒。第五世代コンピュータプロジェクトなどを経て、1997年明治大学文学部に赴任。博士(工学)。専門は、認知科学、情報学、科学基礎論。

主要著書: 『心と認知の情報学』(勁草書房)、『入門マインドサイエンスの思想』(共編著、新曜社)、『心とは何か—心理学と諸科学との対話』(共編著、北大路書房)、『量子の宇宙でからみあう心たち』(翻訳、徳間書店)、『意識の<神秘>は解明できるか』(共訳、青土社)など。

第3回 10月19日(金)

旧石器時代人と無文字の世界

明治大学文学部教授 安 蒜 政 雄

日本人類文化の起源は、旧石器時代に遡ります。まだ文字がなく先史時代とも呼ばれるこの旧石器時代に、どんなことばがあったのかはわかっていません。そのうえ、旧石器時代の遺跡を発掘すると、ただただ石器ばかりが出土し、住居や炉さらに墓などを示す明確な遺構もありません。そうした情報

の少なさが、旧石器時代人の生活や社会の復原を難しくしています。

とはいえ、旧石器時代人の世界には、仕事の共同と分担、それに資材の計画的な備蓄と消費といった、一連の生活原理が存在していました。それが、下地や背景となって、やがて体系的なことばが生まれたのではないのでしょうか。ここに、無文字の世界から現在の私たちに送られてくる、ことばの確かな始まりをみる思いがします。

略 歴： 1946年千葉県生まれ。1969年明治大学文学部卒業。

1978年明治大学大学院文学研究科博士課程修了（文学博士）。

主要著書：『考古学キーワード（改訂版）』（編著）有斐閣 2002年、『考古学の最前線』（共著）学生社 2003年など。

第4回 10月26日（金）

中世人の声をめぐって

茨城大学教育学部教授 酒井紀美

今わたしたちが、日本の中世という時代に生きていた人、たとえば源頼朝や世阿弥の声を聞きたいといっても、それは無理なことです。声は発せられたとたんに消えてしまうものだからです。今ならばテープレコーダーやビデオの音声として残すことができますが、昔はそういう機器などありませんから、中世人の声は時間のカベを越えることができず、だから、私たちは彼らの声を聞くことができないのです。しかし、声そのものを聞くことはできなくても、声が発せられたのがどのような場面で、その声の調子はどんなふうで、そのことばは具体的にどのような内容であったのか、ということならば、時間のカベを越えて今にまで残されてきた文字史料を手がかりにしながら探っていくことは可能です。そこでまずは、そのような眼をもって、中世の史料に取り組んでみることにしましょう。

略 歴： 1947年生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科博士課程修了。日本中世史専攻。現在、茨城大学教育学部教授

主要著書：『中世のうわさ』（1997年 吉川弘文館）、『日本中世の在地社会』（1999年 吉川弘文館）、『夢語り・夢解きの中世』（2001年 朝日選書）、『夢から探る中世』（2005年 角川選書）